

聖書：コリント人への手紙第一 7：25～35

説教題：ひたすら主に奉仕できるため

日時：2022年6月26日（朝拝）

最初の25節に「未婚の人たちについて、私は主の命令を受けてはいませんが、・・・意見を述べます」とあります。このようにパウロが自分の意見をここに記しているのは、コリント教会から届いた手紙に、このことに関する質問があったからだと思われます。さてまずここで問題になるのは「未婚の人たち」とは誰かということです。実はこれが相当議論のあるところでした。第3版まで新改訳はここを「処女」と訳していました。結婚していない女性のことです。それが新改訳2017では「未婚の人たち」となっています。ということは、ここに未婚の男性も含むと解釈したのでしょうか。しかし同じ言葉はこの後、28節と34節、また次回見る36節、37節、38節に出て来ますが、次回見る36～38節では、同じ言葉が「婚約者」と訳されています。第3版までは「処女」と訳されていました。それが新改訳2017で「婚約者」に変わりました。おそらく今日の箇所においても同様に婚約中の女性を指すと考える方が適切と思われる。その人はどうすべきかという問いがコリント教会から来たものと思われます。

パウロはそれに対して「私は主の命令を受けてはいませんが、主のあわれみにより信頼を得ている者として、意見を述べます」と言います。7章10節と12節でパウロはイエス様が話された言葉と、靈感による自分の言葉とを区別していたことを見ましたが、今日の25節の言い方はそれらとも違います。12節でパウロは「これを言うのは主ではなく私です」と言いましたが、その内容は命令でした。しかし今日の箇所にあるのは意見です。彼はこのあと独身を勧めます。しかし28節では彼の意見とは異なって、コリント人が結婚しても罪を犯すわけではないと述べます。ですからここで述べられることは絶対命令ではないですし、必ず従わなければならないものではないということになります。そういうレベルのパウロの言葉もあるのです。しかしだからと言って、これは意味のない言葉だということにはなりません。「主のあわれみにより信頼を得ている使徒の言葉」です。彼の牧会的アドバイスです。それに良く聞いて、考えて、結果的にそうでない道に進んでも良いのですが、自らに適用していくようにとされています。

そのパウロの意見が26節にあります。「差し迫っている危機のゆえに、男はそのまま

まの状態にとどまるのがよい、と私は思います。」 さてこの「差し迫っている危機」とは何でしょう。これはすでに現在起こりつつあることを指す言葉のようです。第三版は「現在の危急のときには」と訳していました。ある人はこれはコリントの地に生じていた特有の危機を指すのではないかと考え、この頃コリントに飢饉があったと言います。しかしそう見るあまり、これはコリント人にしか当てはまらないこと、今日の私たちには当てはまらないことと見るのは正しくないと思います。このあと 29 節で「時は短くなっている」とか、31 節で「この世の有様は過ぎ去る」という言葉が出て来ます。いわゆる終末との関係が述べられます。ですからコリントの町に生じていた何らかの特殊なことがあったのかもしれませんが、それは世界の歴史が終わりの時代に入っているという聖書のメッセージとの関係の中で理解すべきことと思います。そのことはもう少し後で見ます。

パウロはこの状況で「男はそのままの状態にとどまるのが良い」と言います。ここで男に対して語られているから、25 節最初の「未婚の人たち」は男を含むように訳するのが良いとある人は考えるかもしれません。しかし婚約から結婚へ進むプロセスの主導権は当時男にありました。ですからここは婚約中の女性に関することがテーマなのですが、それと関わる男に対して「そのままが良い」と語られていると考えられます。27 節も解釈が難しいところですが、今の状態をそのまま続けるようにという言葉と考えられます。

しかし 28 節でパウロは、たとえあなたが結婚しても罪を犯すわけではないと言います。未婚の女の側からも、結婚しても罪を犯すわけではないと言われます。「結婚しても罪ではない」と言われると、何か結婚が悪いことのように思えて来ますが、この背後にはコリント人たちの主張があったと考えられます。彼らは 1 節で見ましたように、「男は女に触れない方が良い」と考えていました。霊的な人間となるために性的関係は持たない方が良いと。そのコリント人たちは婚約中のカップルに対しても「結婚しない方が良い」と言っていたと考えられます。婚約中の人々は、その強いプレッシャーの下にありました。そこでパウロは、そうではない！と、あるコリント人たちの言葉をひっくり返しているわけです。パウロが勧める独身とは違う選択になりますが、でもそれは罪ではない。パウロはただ親心から心配しています。28 節後半で「ただ、結婚する人たちは、身に苦難を招くでしょう」と。これは先に見た「差し迫っている危機」と関係するのかもしれませんが。結婚すれば、この後見ますように、伴侶への心

遣いや家族の面倒を見る責任が生じます。イエス様はマタイの福音書 24 章 19 節で「それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです」と言われました。そういう目に私はあなたがたをあわせたくないとパウロは言います。牧会者として彼はコリント人たちのことを思い、自らの思うところを述べているのです。

パウロが言いたいことは 29 節以降明らかになります。「兄弟たち、私は次のことを言いたいのです」と彼は言います。そして言います。「時は短くなっています。」これはどういう意味でしょう。この後、31 節で「この世の有様は過ぎ去るからです」とも言われます。ですからキリストの再臨との関係が考えられていると言えます。しかしその意味はパウロが時間的にすぐ主の再臨が起こると考えていたとか、結果的にすぐにそのことは起こらなかったからパウロの主張は間違っていたということは意味しません。パウロが「主は近いのです」などと語る時、彼は時間的な近さを言ったのではなく、質的な意味の近さを言ったのです。キリストは十字架と復活を経て昇天し、聖霊の注ぎが行われました。とするなら歴史はもはや最終段階にあり、神のご計画における次のプログラムはもはや主の再臨しかないという意味で、それはいつでも近いのです。この手紙の 10 章 11 節には「世の終わりに臨んでいる私たち」という表現が出て来て、パウロがそのような終末意識を持っていたことが分かります。

そこで彼は「今からは、妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい」と言います。これもなかなか難しい言葉です。パウロは離婚しなさいとか、妻がいても無視しなさいなどと言っているわけではありません。ただ彼はこの世の有様は過ぎ去ると言います。結婚も地上の制度の一つであり、それは過ぎ去るものです。7 章冒頭で見ましたように、夫婦は互いに義務を果たすべきですが、しかしやがては過ぎ去る結婚のことだけで心が一杯になり、それに囚われて地上の歩みが終わりになることがないように！という意味の、いわばこれは誇張表現です。当然、夫と妻は結婚関係の継続のためにすべきことはしますが、常に「次に来る世」に重きを置いた生活をしなければならぬということです。

次に「泣いている人は泣いていないかのように」と言われます。ある人はこの世で悲しいことに直面して涙し、絶望しているかもしれません。しかしこの世のことは過ぎ去ります。次に喜びの世界が来ます。そのことを忘れてただ泣いている人であってはならない。次の「喜んでいる人」も同じです。これは地上的な事柄で喜んでいる人

のことです。今あっはっはと笑い、喜んでいるかもしれませんが。しかし地上のことは過ぎ去ります。そんなことだけで心を満たしてはならない。次の「買う人」も同じです。物を買って何かを所有すると私たちの心はそれで一杯になってしまいます。しかしそんなことでうつつを抜かしていると主の日は突然やってくる。そして何の準備もしていなかった！と慌てることになりかねません。31節の「世と関わる人」とは、この世で色々な取引をする人のことです。それはこの世で生きるために必要なことです。しかしそれも過ぎ去ります。この世のビジネスで成功しても、それを天に持って行けるわけではありません。パウロはやがては過ぎ去ることではなく、それよりももっと大切なこと、来たるべき御国につながることをのためにこそ生きるように！と言っているわけです。

彼は32節で「あなたがたが思い煩わないように、と私は願います」と言います。これは心が色々なことに分かれて、大事な一つのこと集中できなくなることがないように！という意味です。私たちが心に向けるべき大事な一つのこととは、35節の終わりにはっきり出て来ます。それは「ひたすら主に奉仕する歩み」です。ここに焦点を定めることができずに、心が乱れた状態で思い煩いばかりの毎日を送ることにならないよう私は願っていると言います。そうして32～34節で独身者と結婚した者との違いが述べられます。ここでは独身の男と結婚した男、また独身の女や未婚の女および結婚した女の4つの人々があげられます。これは男女を別にすれば、要するに独身者と結婚した人の違いです。独身の人について32節後半から「独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります」とあります。独身の人にはみなこうであるかと言えば、そうでないかもしれませんが、独身の人はこのように歩むことができるということです。一方、結婚した人はどうでしょう。33節に「しかし、結婚した男は、どうすれば妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、心が分かれるのです」とあります。一見、どうしたら妻に喜ばれるか、と心を配ることは悪いことであるような印象を受ける方がいるかもしれませんが、そういう意味ではありません。パウロはただ事実を述べているだけです。そして結婚した人はもちろん伴侶に心を配るべきです。しかしこの点で結婚した人は独身者より不利であるということが確かに言われています。独身の人には、ただ主に心に向けて歩むことが可能ですが、結婚した人は、それに加えて結婚相手のことも心にかけて、仕えなければなりません。心にかけることが増えるのです。それは悪いことではありませんが、主のために専ら心と体をささげる歩みが難しくなります。同じことがその後、女性側からも語られています。

パウロは 35 節で、このように言うのはあなたがたを束縛しようとしているからではないと言います。コリント教会のある人たちは束縛しようとしていました。婚約中のカップルに「結婚するな！」とプレッシャーをかけていました。パウロは結婚をお勧めしないという点で、表面上は似たことを言っていますが、それはコリント人のある人たちのように彼らを束縛しようとしてではない。むしろあなたがた自身の益のためだと言います。彼らの益のために牧会者としてアドバイスしているのです。結果としてその意見と異なる道に進んでも良いということを彼はすでに 28 節で言いましたし、次回見る 36 節以降でも言いますが、この自分の意見によく耳を傾けて決めてほしいと思っています。彼の願いの中心ポイントは 35 節最後にありますように「あなたがたが品位ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるようになる」ということです。どちらの道を進むにせよ、この大切な目標に向かうことができればそれで良いのです。その歩みを助けるためのパウロの意見、アドバイスなのです。

以上をまとめると次のようになるでしょうか。パウロ個人としては独身でいる方が良いとしているのは明らかです。7 節ですでに彼は「私が願うのは、すべての人が私のように独身であることです」と言っていましたし、8 節でも「結婚していない人やもめに言います。私のようにしていただけるなら、それが良いのです。」と言っていました。その彼はどういう思いを持って独身の道を進んでいたかが今日の箇所を示されていました。理由は大きく分けて二つです。一つは「時は短くなっている」ということ。今や救いの歴史は最終段階にあります。主のため、福音のために、用いることができる機会は限られています。時は短くなっています。そういう「時」の意識の下でパウロは独身の道を進んでいたことを知らされます。そしてもう一つの理由は集中して主のために奉仕するには、結婚しているより独身が有利であるということです。結婚すれば、相手への配慮を含め、色々な責任やこの世に属することの割合が増えますが、独身ならそれらに妨げられず、ひたすら主に奉仕することができます。しかしこのための前提条件は独身の賜物が与えられていることです。自分を制することのできる賜物が与えられていることです。ですからパウロはすでに 7 節で「しかし、一人ひとり神から与えられた自分の賜物があるので、人それぞれの生き方があります」と言いました。どっちが優れていて、どっちがより劣っているということはありません。独身の賜物がない人が無理に独身の道を行っても大失敗するだけです。自分に対する神の召しを受け止めて、その賜物に従った道を行くことが大切です。

そして今日のパウロの言葉から教えられることは、独身者も結婚した者も、品位ある生活を送って、ひたすら主に奉仕する歩みを第一の目標とすべきであるということです。この目標はすべてのクリスチャンに共通のものとして語られています。独身の人は「自分は伴侶や家族への心遣いが少なくなくて済むから、気楽だ！だからもっと自分を楽しませて生きよう！」とするのではなく、自らに独身の賜物があるかどうか主の前で問うて、もしそれが与えられているなら、その独身を通して一層主にお仕える歩みへと自らをささげるべきです。また結婚の賜物が与えられている人は、結婚によって主に奉仕することができなくなると悩んだり、逆にだから奉仕は少なくとも良いと考えてはなりません。一人で生活することができないため、結婚へと導かれました。しかしその結婚は、ただお互いのこと、この世のことで明け暮れるためではなく、二人が強め合って一層主のために奉仕する歩みに現れてこそ本当です。単純に比較するなら独身者より課題は多くなりますが、向かうべき目標は独身者も結婚した者も同じです。今日のパウロの言葉を通して改めて私たちが持つべき視点を確認させられたいと思います。時は短くなっています。この世の有様は過ぎ去ります。私たちの心と生活が、やがては過ぎ去るこの世のことで一杯になり、主の日のために何の準備もしなかった者、何の働きもしなかった者となることはありませんように。限られている残された時、残された機会を用いて、永遠に価値が残るもののために心と体をささげ、それぞれの置かれたところで、ひたすら主に奉仕する者となることを祈り願い、私たちの主の救いと愛にお答えする歩みをささげる者へ導かれて行きたいと思います。